

異世界の処刑塔で偽の  
番を演じていた元登山  
家  $\Omega$  が薬草切れのヒー  
トで  $\alpha$  の死刑執行人に  
「演技はもう終わりだ  
」とノットで繋がれ本  
物の番にされる話

「——っ、は……」

呼吸が浅い。窓から差す冬の西日が部屋を薄暗く切り取る。石壁に染みついたヴォルフの匂い。鉄と、血と、その奥にある焦げるような甘さ。嗅ぐだけで膝が笑う。

（高山病じゃない。これは——）

前世で何度も経験した高山病の症状と、身体の芯がとろけていく感覚はまるで違う。頭は澄んでいるのに身体だけが勝手に蕩けていく。それが口の反応だと、三年かけて嫌というほど学んだ。

査察は午前中に終わった。偽の番は——役目を果たした。

「契約は解消だ。自室に戻れ」

ヴォルフの声が、背後から降ってくる。低くて、重くて、声帯の振動が鼓膜じゃなくて項腺を直接揺さぶる。

立ち上がりとした脚が裏切った。膝がくずれ、床に手をつく。

「っ……くそ……」

「動けないのか」

足音が近づく。床板が軋む。192cmの巨躯の重みが背後に迫る。

「……来るな」

声が震えた。ヒートのせいだ。——そう思いたかった。

「来るなって言ってる……っ♡」

甘い。自分の声が甘い。項腺から漏れ出したこのフェロモンが、ヴォルフの匂いと混ざり合って、部屋の空気を粘つかせていく。

ヴォルフが膝をつく気配がした。リュカの視界の端に、大きな手が映る。両腕に刻まれた刺青——処刑の記録。命を絶つための腕が、四日間、リュカの項腺に偽の痕をつけ続けた。

「……お前のフェロモンが漏れている。この匂いで塔の階下まで届く。他の~~は~~はいないが、~~の~~の看守にも異常だと気づかれる」

「知って……る……っ」

わかってる。だから逃げたい。逃げたいのに脚が動かない。ヴォルフのフェロモンが間近で濃度を増したせいで、身体が鉛みたいに重い。いや——重いんじゃない。身体が動きたくないのだ。ここから。この匂いの中から。

「リュカ」

名前を呼ばれて、項腺がびくんと脈打った。

「っ——」

口を押さえる。今のは声じゃない。喘ぎだ。名前を呼ばただけで、<sup>○</sup>の身体が喘いだ。  
(ふざけるな。こんな——前世の俺なら、こんな——)

前世。冬山。吹雪の中、判断を迫られた場面。あの時は身体が震えても頭は冷静だった。  
今は頭が冴えているのに身体が勝手に蕩ける。真逆だ。

ヴォルフの手がリュカのうなじに触れた。

「ひっ……♡♡」

びくり、と全身が跳ねる。項腺のすぐ横を、太い指の腹が滑る。四日間つづけた偽の痕——  
赤黒い吸い痕の上を、なぞるように。

「まだ残っている。昨夜の痕が」

「は……っ♡触る、な……っ♡契約は、終わったって——」

「終わった。だからこれは契約じゃない」

背筋が凍る。

振り返る。灰色の瞳が目の前にある。近い。瞳孔がぐっと開いている。虹彩の灰色が薄まって、黒い瞳孔がほとんどを占めている。<sup>●</sup>の本能が剥き出しになった目。

「三年前。お前が赴任してきた日に、お前の匂いで覚醒した」

知っている。四日前に聞いた。

「三年間、一度も手を出さなかった」

それも聞いた。

「査察の話を口実にした」

——それも。

「お前を最上階に呼ぶために。每晚触れるために。偽物だと自分に言い聞かせるために」

ヴォルフの声が震えている。鉄面皮が、砕ける。今まで聞いたことのない声。感情をむき出しにした、低い、掠れた声。

「リュカ。帰れと言った。今なら、まだ——」

「帰れない」

リュカの口が勝手に答えた。

「お前のフェロモンのせいで、足が——」

「嘘をつくな」

顎を掴まれる。上を向かされる。灰色の瞳が至近距離からリュカを射抜く。

「お前の項腺は嘘をつけない。今、お前の匂いは——ヒートの匂いだけじゃない。俺を、求めている匂いだ」

「っ……っ♡♡」

心臓が暴れる。凶星だった。薬草が切れかけた身体は、ヒートの熱だけじゃなく、ヴォルフ個人への反応を隠せなくなっている。

リュカは笑った。

唐突に。ヒートで身体が燃えているのに、おかしくて。

「お前……不器用すぎる。死刑執行人が、三年も我慢して……偽の番なんて回りくどいこと考えて……」

「笑うな。俺が今どれだけ——」

「知ってる」

リュカの手がヴォルフの襟を掴む。口の腕力では引き寄せられない。だがヴォルフが自分から屈んだ。

唇が触れる。

五日目の——練習じゃない、キス。

ヴォルフの唇が熱い。鉄面皮の見た目とは裏腹に、いつもそうだった。四日間のキスの練習で知った。この男の唇は、中身と同じで——灼けるほど熱い。

舌が入ってくる。リュカの口腔を舐め上げるように、深く。四日間の練習で覚えたリュカの口の中の形を、確認するように丁寧に舐めて、それから——乱暴に掻き回した。

「ぐっ♡♡——は、ふ……っ♡♡」

項腺がかつと発熱する。キスを通じてヴォルフのフェロモンが流れ込んでくる。粘膜から直接。葉草の効力が残り滓もなく焼き飛ばされていく。

下腹に電気が走り、腰がぐたりと崩れた。ヴォルフの腕がリュカの腰を支える。片腕で。軽々と。

「っ♡♡お……っ♡♡ヴォルフ、フ……っ♡♡」

キスが深くなる。ヴォルフの舌がリュカの舌に絡みつき、吸い上げ、噛む。銀の糸が顎を伝い、滴り落ちる。

（これは——演技じゃない。もう、演技じゃ——）

思考が溶ける。四日間「練習」と名づけて触れ合ってきた身体が、名前を外された途端に暴走する。

ヴォルフがキスをしたままりユカの身体を持ち上げた。ベッドに押し倒す。背中が薄い寝台に沈み、ヴォルフの巨軀が覆いかぶさってリユカの視界を埋め尽くす。

「服を脱がすぞ」

「っ……勝手に——」

言い終わる前に、看守の制服のボタンが引きちぎられた。金属のボタンが石の床に弾ける音。冬の冷気が肌に触れて——すぐにヴォルフの体温に塗り替えられる。

「見るな……っ♡」

身を振る。だがヴォルフの目は離れない。灰色の瞳が——黒い瞳孔が、リユカの身体を舐めるように見下ろしている。

細い肩。前世の登山で鍛えた腹筋の名残。〇の身体の限界で線が細く、それでも看守として鍛えた筋が薄く浮いている。そして——内腿が、すでに濡れていた。何も触れていないのに。ヒートの潤滑液が、ヴォルフのフェロモンに反応して溢れ出ている。

「……こんなに濡れて」

「ヒートの……っ♡せいだ……っ♡♡」



「ヒートのせいかな。——では四日間、俺が痕をつけるたびに息を殺していたのもヒートのせいかな？」

「……っ♡♡」

答えられない。四日前、ヒートはまだ来ていなかった。

ヴォルフの舌がリュカの首筋を這った。四日間つづけた偽の痕の上を。吸い痕の上を、なぞるように舐めて——そこに、歯を立てた。

「んんっ♡♡♡——っ♡♡♡は、おっ♡♡♡」

痛みが甘い。♡の身体は♡に噛まれることを快楽として受け取る。四日間の偽物の痕。それを上書きするように、ヴォルフの歯が深く食い込んでいく。

「これは俺がつけた痕だ。偽物のつもりだった」

ぎり、と歯が肌に沈む。

「本物にする」

「おっ♡♡♡ヴォルフ……っ♡♡♡いた……甘い♡♡♡♡♡なんで、噛まれて、甘いんだ……っ♡♡♡」

（前世の俺にはなかった感覚だ。噛まれて快楽が走るなんて……この身体は……っ♡♡♡）

唇が鎖骨に移った。二日目の夜につけた二つ目の痕。服を着れば隠れる位置。ヴォルフが「信憑性のため」と言って吸いつけた痕。

今、同じ場所を——もつと強く吸い上げられて、背中が弓なりに反った。

「ひ……っ♡♡おあっ♡♡そこ……っ♡♡」

「鎖骨の痕を吸うと、お前の腰が浮く。——二日前から知っていた」

「っ♡♡知って、て……っ♡♡やって、た……っ♡♡?」

「ああ。お前が声を殺して耐えていたのも。内腿を擦り合わせていたのも。全部見ていた」

「この……っ♡♡変態……っ♡♡」

声に怒りは無い。羞恥と、悔しさと、それを上回る快楽で声が潰れている。

ヴォルフの手がリュカの内腿を滑った。ぬるりと指が濡れる。ヒートの分泌液。何もされていないのに——いや、もう十分すぎるほどされている。四日間の偽物の接触が下地を作って、今、本物の触れ合いがその上から全部を塗り替えようとしている。

「ヴォルフ……っ♡♡待って……っ♡♡そこ……♡♡」

「待たない。三年分だ」

指が一本、リュカの中に入った。

「おっ♡♡♡——は……っ♡♡♡ああ……っ♡♡♡」

ヒートで蕩けた身体は、指一本で痙攣する。内壁がヴォルフの指にきゅうっと吸いついて、離さない。

（やだ……っ♡♡♡身体が、勝手に……っ♡♡♡締めつけて……っ♡♡♡）

前世の自分なら絶対にしない反応。♡の本能が身体を支配している。腰が勝手にヴォルフの指を飲み込もうとする。

「奥まで濡れている。——お前の身体は、最初から俺を受け入れる準備をしていた」

「ヒートの……っ♡♡♡」

「ヒートのせいだと言いたいなら好きにしろ。だがお前の項腺は俺の名前の匂いがする」

「な……っ♡♡♡何言って……っ♡♡♡」

指が二本に増えた。リュカの内壁を撫でるように、奥へ。♡の身体は柔らかい。ヒートの潤滑液が指の動きを滑らかにして、ずちゅ、ずちゅ、と卑猥な水音が石造りの部屋に響く。

「ひっ……♡♡♡ああ……っ♡♡♡そこ、そこだめ……っ♡♡♡♡♡」

ヴォルフの指がリュカの中の敏感な箇所を的確に押さえた。三年間——匂いを嗅ぎながら手を出さなかった三年間、この男はリュカの何を見ていたのか。呼吸がどう変わるか。どこに触れれば身体が強張るか。全部、観察していたのだ。

「ここを押すと、お前の爪が俺に食い込む。——知っている」

「知ってっ……♡♡おおっ♡♡♡やめ……やめてっ……♡♡」

リュカの爪がヴォルフの背中に食い込んでいた。口の爪は鋭くない。だが力が入っている。ヴォルフの広い背中に赤い筋が走る。

「もっと痕をつけろ」

ヴォルフの声が獣じみている。低く、唸るように。

「お前が俺に刻む痕は——俺がお前に刻む痕と同じだ」

指が三本に増える。

「おおおお♡♡♡む、無理……っ♡♡そんな、に……っ♡♡」

「入る。お前の身体が許している」

ぐちゅ、ぐちゅ、と三本の指がリュカの中を掻き回す。内壁が指の形に合わせて開き、潤滑液が溢れて太腿を伝う。ヴォルフの手が濡れて光っている。

「は……っ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡ヴォル、フ……っ♡♡♡中、ぐちやぐちや……っ♡♡」

(男なのに……っ♡♡♡前世では男だったのに……指三本で、こんな、声……っ♡♡♡この身体が、勝手に……っ♡♡♡)

快感が脊髄を駆け上がる。視界が白く弾ける。一度目の絶頂が、指だけで訪れた。

「おおおおっ♡♡♡♡♡——っ♡♡♡イツ……て……っ♡♡」

内壁がびくびくと痙攣してヴォルフの指を締め上げる。だがヴォルフは指を抜かない。痙攣する内壁を更にかき回して、絶頂の波を引き延ばす。

「っ♡♡♡やめっ♡♡♡イったばかり……っ♡♡♡もう……っ♡♡♡♡♡」

「♡のヒート中は連続で達する。——止まらないぞ」

ヴォルフの指が動く。絶頂の余韻で過敏になった内壁を、容赦なくこすり上げる。敏感な場所を親指で圧しながら、中の三本をぐりんと回転させた。

「ひおおっ♡♡♡♡——おおっ♡♡♡そこ、そこっ♡♡♡♡♡だめっ♡♡♡回さないでっ♡♡♡♡♡」

二度目の波が、一度目よりも大きく押し寄せる。

「っ♡♡♡っ♡♡♡っ♡♡♡あっあっあっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」